

小論文

解答の指針

問一 課題文における筆者の主張を、「歴史的」「政治的」という語を用いて、一五〇字以内で要約する問題である。課題文は、恋愛と結婚について社会はどう見てきたか、見ているかという視点から述べられている。現代に生きる私たちは結婚を好きな人同士ですることが当たり前であると考えがちであるが、「歴史的」「政治的」に見ると異なるのではないかという主張である。これらの点をうまくまとめると、良い解答が作成できるであろう。

まず、「歴史的」な視点は、第三～八段落に述べられている。総じて「恋愛と結婚は相いれないもの」（第八段落）としており、他の段落から言葉を借りてくれれば書きやすいだろう。次の「政治的」な視点は、第九・十段落に述べられている。結婚は、「戦争に勝つための重要な手段」（第十段落）としており、現代の私たちには想像しがたいことが記されている。詳細は述べられていないので書きにくい。一五〇字以内と分量が少ないので、うまくまとめよう。

問二 傍線部「戦後10年以上が経過してもなお、皇室や政府の間では、まだ恋愛結婚を不道徳とみなす価値観が強く残っていたのです」とあるが、「恋愛結婚を不道徳とみなす価値観」について自らの考えを課題文の内容と関わらせながら六

○字以内で述べる問題である。したがって、課題文のどの部分が「恋愛結婚を不道德とみなす価値観」とされているか分析すると書きやすくなるだろう。その点について、次の三点を記す。

文章[A]の「歴史的」な視点の中に、「まともな家の人間」(第四段落)という文言があり、明治時代からの「家制度」に関わる文言と考えられる。明治時代の社会を想起することで何らかの形で言及したいところである。「家制度」は一家の長(戸主)を長男である男性に担わせて、家族の統率と存続を重視させた。そのため、戸主は家内で大きな権限を有し、婚姻相手は戸主が決めることもあり、子供をたくさんもうけることで家を存続させることが当然とされた。

文章[A]の「政治的」な視点の中には、「結婚報国」(最終段落)という文言があり、多くの受験生には初耳であろう。課題文中にも説明がないが、四文字の漢字だけでも「結婚をして国に報いる」という、おおよその理解はできるだろう。戦前、戦中の国家では戦争に総力戦で挑むため、出産を多くして子供を増やすという国策が採られるようになった。「産めよ殖やせよ」がスローガンとなり、女性は早く結婚することが求められた。したがって、恋愛によって結婚相手を慎重に選ぶという社会にはならなかったと推察できる。

文章[B]の中には、皇室(や政府)を土台にした結婚観が述べられている。皇室では恋愛結婚が不道德であるとみなす価値観であったということが、本問の柱でもある。これも課題文中に説明はないが、先述の家制度や戸主が関係していると考えられる。明治維新以降、天皇を中心とする中央集権体制を確立するためには、家で戸主を絶対視させることで、国家においても天皇を絶対視させるようになぞらせるという考え方があったと言われる。戦後しばらくは、その名残として皇室の恋愛結婚が不道德であるとみなす価値観が引き継がれたと考えても不思議でない。これは「歴史的」視点と「政治的」視点の融合とも言えよう。

本文の内容と関わらせながら解答するため、以上三点の中からいくつかを選んで、これらに対する自らの考えを述べることになる。現代社会では、人権尊重が絶対的なものであることから、恋愛結婚を不道德とみなすことはほとんどない。よって、基本的には、恋愛結婚を否定することなく解答を作成することになる。私たちが抱く現代の結婚

観からは想像しにくいことばかりで、本問は難しく感じたかもしれない。自分の恋愛結婚観を述べることで字数稼ぎをしなくなるかもしれないが、基本的には「歴史的」「政治的」視点から述べる努力をしよう。

本問はやや難しく感じられるかもしれないが、「歴史総合」などの学びが深い追究、探究活動につながっている考察事例であり、ある意味鋭い問題でもある。学校での幅広い学びの多くが小論文の問いと結びついているととらえて、日頃の学びを大切にする姿勢や態度を忘れないよう心がけよう。